

# 「接触場面」における日本語の曖昧性に関する考察

## ——日本語教育への「接触場面」概念の導入へ向けて——

鄭 恵 允

### 0. 問題の所在

言語は多少の差はあるとしても本質的に曖昧性を有している。日本語は特に「場面依存性」<sup>①</sup>が強い言語であって、間接的表現などにみられる言語の曖昧さはコミュニケーションにおいて欠かせないレトリックであるとされる傾向にある。日本人はこのような日本語の曖昧性を有効に用いることによって、コミュニケーション活動を円滑に行っていると言えよう。ところが、外国人学習者にとって、この日本語の曖昧性はしばしばコミュニケーションの障害となってしまう<sup>②</sup>。しかもこのような問題に関する実質的な研究は、日本語教育においてあまり行われていないというのが現状である。そこで、本稿ではこれらの問題を日本語教育の中でどのように取り扱うことができるのかといった視点から、接触場面における外国人学習者が感じる日本語の曖昧性を日本語教育の立場からとらえ直すことを目的とした考察を行うことにする。外国人学習者に顕在化しやすいコミュニケーション障害を克服させるためにも、「接触場面」概念の日本語教育への適用は、今後重視されるべきだと考えるからである。具体的には、次に示す課題を設定することにより、検討を加えていくことにする。

- ①「接触場面」の意味内容を明らかにする。
- ②「接触場面」における日本語の曖昧性の内実を明確にするとともに、具体的な事例を取り上げた上で、分析枠組みを設定し、これに基づいた事例分析を行う。
- ③日本語教育において「接触場面」概念の導入の意義を明らかにする。

### 1. 「接触場面」の意味内容

#### 1-1. 「接触場面」の概念

ネウストプニー (1996)<sup>③</sup>によると、「日本語コミュニケーション限定能力者」と考えられる「外国人」と母語話者が参加する場면을「接触場面 (contact situation)」「外国人場面 (foreign situation)」と呼び、これに対して母語話者だけがコミュニケーションに参加する場면을「母語場面 (native situation)」「内的場面 (internal situation)」と呼んでいる。さらに、「接触場面」は母語場面とはかなりの点で異なった特徴をもっているために、日本語教育の目標として母語場面だけを教育に取り入れることは現実的ではない<sup>④</sup>としている。実際に接触場면을調査すると、接触場面の特徴を次の2側面から大別することができる。一つ目は、外国人話者側の特徴で、これ

はコミュニケーションの能力が限られているため不完全にしかコミュニケーションすることができないということと、自分の能力の限界について自覚をもつことに起因している。二つ目は、母語話者側の特徴で、外国人話者の不完全な能力を認識し、自分自身のコミュニケーションを適当に変容させることであるとされる。

次項では、接触場面における外国人話者側・母語話者側からのそれぞれの特徴をもう少し詳しく考察することによって、日本語教育に「接触場面」概念を導入する必要性について述べることにする。

#### 1-1-1. 接触場面における外国人話者の特徴

接触場面における外国人話者の特徴は3段階において現われる。第1段階は、発話が始まる前の外国人話者の予想や計画に関する特徴であり、第2段階は実際に発話が始まった後、外国人話者が直面する問題とその処理に関する特徴である。第3段階では、発話が終わった後の外国人話者の意識に関する特徴がみとめられる。

第1段階は問題の予測段階である。この段階では、コミュニケーションの不成立を予想することによって最初から一定の事柄に関するコミュニケーションを避けるという特徴がみられる。これは、ある単語の発音が難しく、正しく発音できないだろうという予測からその単語の使用を避ける現象である。特定の単語の使用を避けたり、コミュニケーション過程において何らかの問題（不適切さ）が起こるという予測から、話し手がこの問題をふせぐために一定の措置をとることを「事前訂正」(pre-correction)という。第2段階は問題が現われた場合のことを指す。言語行動が開始されたときにも外国人話者は数多くの問題に直面することになる。外国人話者は日本語の規則の一部を使えるとはいえ、そのすべてを習得しているわけではない。したがって、それまで習得していた日本語の規則の中に、その場面で使用できる規則が見出せないときには困難を感じる事が想定される。このような困難を克服するために、外国人話者は自分の母語の規則をそのまま適用したり、日本語とも母語とも異なる新しい規則を自分で作ったり、または最低限の規則しか適用できないまま、言語的規約なしのコミュニケーションを行うのである。文法的規則をまったく使わずに、ただ簡単に単語を並べることはこの一つの例である。この段階に行われる訂正を「事中訂正」(in-correction)とも「事後訂正」(post-correction)ともいうのである。第3段階はコミュニケーション終了後にみられるもので、コミュニケーション後の外国人話者の意識、たとえば自分自身の発話の評価などに関する特徴がみられる。しかし、この段階の研究は第2段階の研究が誤用分析・中間言語の分野で活発に研究されているのに対して、いまだにほとんどなされていない状況にある。

#### 1-1-2. 接触場面における母語話者の特徴

接触場面において、多くの場合、母語話者の発話も変容することが「フォリナー・トーク」(foreigner talk: 外国人向けの話し方)の研究で明らかにされた<sup>6)</sup>。この研究では母語話者の変容

が普遍的なものであることを証明している。ネウストプニー (1995)<sup>6)</sup>は日本語のフォリナー・トークに次のよう特徴があるのではないかという仮説をたてている。

- 1 代名詞の特殊な使用 (たとえば, ワタクシ, アナタなどの乱用)
- 2 敬語使用に関する制約 (たとえば, 敬語の大幅な簡略化)
- 3 児童語彙の使用 (子供の話や小学校低学年の教科書などで使われる語彙が多く使用される)
- 4 外国語語彙の使用 (たとえばレンガの代わりにブリック)
- 5 外国語の使用 (母語話者が日本語を使わずに, 英語などの外国語に切りかえること)
- 6 ジェスチャーの使用 (たとえば, ものの大きさや形を示すジェスチャー)
- 7 話題に関する制限 (たとえば, 抽象的な話題, 冗談などを避ける)
- 8 第三者を仲介者にするネットワーク (外国人話者に直接話しかけないで, 第三者の日本人に発話を向けさせること)

日本語教育において接触場面における母語話者の特徴を教えることにはどんな意義があるのでしょうか。日本語学習者が日本語を学習する際, 母語話者の言語使用により大きく影響を受ける。しかし, フォリナー・トークのように接触場面における母語話者の言語使用が特殊なものであるとすれば, 学習者が不自然なことばのモデルをそのまま学習モデルとして受け入れ, これを模倣することは危険を伴いかねない。このことから, 母語話者のルールをそのまま学習モデルとして提示するより, 母語話者と日本語学習者の接触場面, すなわち相互作用におけるルールの提供とその意識化が必要となるのである。

## 2. 「接触場面」における日本語の曖昧性

### 2-1. 言語表現における意味論的曖昧性

「接触場面」における日本語の曖昧性について考察する前に, まず, 言語表現における一般的な曖昧性とはどのようなものであるのかを明確にする。藤崎・星合 (1984)<sup>6)</sup>は情報工学の分野で私たちが認知的にどのように曖昧性を処理していくのかといった視点から曖昧性を三つに大別している。第1種の曖昧性 (ambiguity) とは, 単一の言語表現に対して相異なる複数の解釈が考えられることを指す。例としては同音異義語: 「くも」に対する「雲」「蜘蛛」が挙げられる。第2種の曖昧性 (vagueness) とは, 言語表現の指示範囲境界の不確定性を指す。つまり, 色に関する語彙を選んだ場合, 色をあらわす単語の意味は, 単色光の波長を座標軸に選べば, その座標軸の一部分の範囲 (これを単語の指示範囲という) であらわすことができる。しかし, 赤の指示範囲は何ミクロンから何ミクロンと厳密に決定することはできない。たとえば, 赤と橙色の境界付近の波長を適当に選んで何の色に見えるかを人間に答えさせる実験を行えば, 答えには個人差によるばらつきもみられるし, 同一人物でも数回の試行を行えば, その答えが一致するとも限らないと言える。第3種の曖昧性 (generality) とは, 発信者に要求されている記述の欠落による情報

の不足を指し、一般に、要求される情報をあらかず概念の上位概念によって記述されることに起因する。たとえば、国鉄の特急グリーン券を買おうとするとき、親子二人連れの場合でも、「大人1枚、子供1枚」と区別するという必要はなく、ただ「2枚」といえばよい。しかし、普通乗車券を買う場合には、ただ「2枚」というだけでは不十分で、「大人1枚、子供1枚」と区別する必要がある。前者のように情報不足のまま記述することは、意志疎通の障害となる。

以上、情報工学の提示する言語表現における曖昧性について概観したが、このような曖昧性の分類は、意味論的（例：くも「雲」「蜘蛛」）・構造論的（例：教師の評価「教師が評価する」「教師を評価する」）な曖昧性であるため、本稿で示そうとしている「接触場面」における曖昧性の意味内容としては不適であると考えられる。本稿で扱う日本語の曖昧性の意味内容は、藤崎らが提示する言語表現における曖昧性、すなわち意味論的な曖昧や言語構造論的な曖昧とは異なるものなのである。日本語は、文の前後の関係（言語的な脈略）とともに、話し手と聞き手を取り囲む状況（言語外的脈略）に大きく依存する「場面依存性」が強い言語であると言える。このように場面依存性が強いいため、ある状況下において言語以外のキーを見出しにくい外国人話者にとっては、日本語でコミュニケーションを行うときに、状況・場面における曖昧さをもっとも多く感じるのである。したがって、日本語の曖昧性は、日本人話者だけがコミュニケーションに参加する「母語場面」より、母語話者と外国人学習者が同時にコミュニケーションに参加する「接触場面」において顕著化するものと指摘することができる。

## 2-2. 「接触場面」における日本語の曖昧性の意味

外国人学習者が日本語を学習する際、辞書の役割は大きい。彼らは辞書に頼りながら、少しずつ意味を理解し解釈していくのである。しかし、辞書に書かれている意味は、しばしば実際の場面において用いられる意味とは多少異なる場合がある。『国語学大辞典』では「語の意味」について次のように定義されている。

「語の意味とは社会習慣的に多かれ少なかれ一定した語使用上の場面的・文脈的諸条件および語と連合した文化人類学的諸特徴の総体である」<sup>7)</sup>

しかし、現実には辞書における語の意味は、語使用上の場面的・文脈的諸条件、および言語と連合した文化人類学的諸特徴についてほとんど言及するものではない。このような辞書を頼りとする外国人学習者は、辞書の意味と実際の場面で使われる意味とのずれに戸惑いや曖昧さを感じてしまうのである。すなわち、「辞書の意味」と「場面的意味」とのずれによる困難を解消していく手段を身につけていない外国人学習者にとって、このような意味のずれは曖昧さを感じさせる大きな要因となるのである。そこで本稿では「辞書の意味」と実際の場面で使用される「場面的意味」とのずれによる曖昧性を「場面的な曖昧」と名付け、「接触場面」における日本語の曖昧性をこのような「場面的な曖昧」としてとらえることにする。このような「場面的な曖昧」には、その場に関与する関連事項、すなわち話題となっている事態の認識、先行文脈、場の雰囲気、参

加者同士の役割関係、過去の経験、事物の空間関係などの事項が深く関わることになる。このような場面における一連の関連事項を、文化の異なる外国人学習者がその場で読み取り、使いこなせるようになるためには相当の困難を伴うのである。

### 3. 「接触場面」における曖昧性の事例分析

前節で述べたように、「接触場面」における日本語の曖昧性を「場面的な曖昧性」として規定したが、実際に「接触場面」において学習者が感じる「場面的な曖昧性」が具体的にどのように現われるのかについて、事例を取り上げることにより分析を行うことにする。分析の手續きとして、分析単位を語彙レベルに限定するとともに、藤崎らが提供した三つの曖昧性を援用することにより、学習者が感じる曖昧性を五つに分類することにする。語彙レベルにおける日本語の「場面的曖昧性」は学習者が曖昧性を感じる原因により次のような五つに分類できる。

#### 3-1. 分析方法及び内容

以上の五つの曖昧性を分類枠組みとして設定し、これに基づいた分析を行う。分析内容としては、辞書的な意味<sup>9)</sup>と場面的な意味の検討を通して、ずれが大きいと想定される語を分析対象として抽出し、辞書的な意味と場面的な意味との間にどのようなずれがあって、そのずれにより日本語学習者はどのような曖昧性を感じるのかに注目した検討を行うことにする。

(1)	語の多義的意味による曖昧性 (多義的曖昧性) <sup>9)</sup>
	語の意味が辞書に載っている意味より実際の場面で使われる意味が多数であり、辞書的な意味以外には予測できない場合に生じる曖昧性
(2)	語界の不確定性による曖昧性 (不確定的曖昧性)
	語が指示する範囲が明確でないことによる曖昧性。この種類についてはさらに時間・相手における不確定性といった2つの下位概念に分類できる
(3)	情報の省略による曖昧性 (省略的曖昧性)
	その語一つだけでは意味を表わすのが不十分であるにも関わらず、後ろに来る情報が省略されたことにより生じる曖昧性
(4)	習慣的用例による曖昧性 (習慣的曖昧性)
	母語話者同士では暗黙の了解として理解されることが辞書の意味でしか理解できない外国人学習者にとって、その隠れたルールが見い出せないことによる曖昧性
(5)	母語干渉による曖昧性 (母語干渉的曖昧性)
	学習者自身の母国語の使い方から語の意味などを予測し、解釈してしまうことによる曖昧性

【表1】語彙上における日本語の「場面的曖昧性」の5種類

### 3-2. 分析結果の考察

以下は前述した5つの曖昧性を枠組みとして援用することにより、事例1から事例5までにおいて分析した結果についての考察である。事例1については辞書の意味、および実際場面で使われる場面例を小文字で本論の中でとりあげるとともに、事例2から事例5までのものについては本論後の「資料」に示した。

#### 〈事例1〉「結構」

##### ・辞書の意味

- A 構えを作ること。組み立てること。構え。規模。布置
- B よくまとまった状態であること。
- C 完全ではないが相当に。何とかうまく。

##### ・場面例

- ①「では、今晚の食事はKでよろしいでしょうか」  
「えー、結構です」
- ②「鈴木さん、今日一杯いかがですか」  
「ええ、結構ですね」
- ③「これすごくいいワインです。まあ、どうぞ」  
「今日は車で来ておりますので、結構です」
- ④「結構なスピーチをどうもありがとうございました」  
「こちらこそ、どうもありがとうございました」
- ⑤「へえ、料理も結構上手だね」  
「そう！」
- ⑥「もうちょっといかがですか」  
「いやあ、本当に結構ですから」

#### 〈事例1：多義的曖昧性「結構」〉の分析

場面例にあげた①から⑥はそれぞれ少しずつ異なる意味を持っている。①は形式的には賛成している。しかし場合によってはイントネーションや顔の表情により、本音としては気が進まないが断われない状況も考えられる。②は大賛成、③は強い断わりを表わしている。これに対して⑥は丁寧な断わり表現になる。また、④は「すぐれた・見事な」の意味でほめことばになるし、⑤は「意外に」の意味を持っている。辞書で学習者がAからCの意味を覚えたとしても、①から⑥の意味を把握し、使いこなせることはなかなか困難であると言えよう。④がBの例文になり、⑤がCの例文になると言えるがそれ以外は、辞書に載っている意味だけではその意味の想定が難しいのである。

#### 〈事例2：不確定的曖昧性「さき」〉の分析

場面例①はA：前方にの意味で、②はB：物・作用などが向かう所の意味としてほとんど混乱はなく使われる。しかし、③④については③は過去のことを、④は未来のことをそれぞれ表わしている。さらに、「さき」の過去の意味だけにしぼって考えてみると、過去どれくらいの時間を「さき」と言えるのかといった曖昧性が生じる。「さっきはすみませんでした」「この間はすみませんでした」「さきほどはすみませんでした」といった例文があるとしたら、これらの例文における「さっき」「この間」「さきほど」の使い分けは明確な基準を持たずに、「さき」が指示する範囲の不確定性による曖昧性が生じるのである。

#### 〈事例3：省略的曖昧性「ちょっと」〉の分析

「ちょっと」は場面例にもみられるように「ちょっと」の次に省略の形がよくみられる。省略されたところを聞き手が補うことによって、相手の意図を把握していくわけであるが、日本語の母語話者であれば、①の後ろには「お願いします」「頼む」などの依頼表現が想定できるし、②③の場合は「分かりません」「急いでいるので」といった断わり表現がくることが想定できる。そして、④は状況によって「見物ですよ」「すごいですよ」のような言葉が予測される。しかし、言語以外の要素について予測がしにくい外国人にとってはこのような「ちょっと」は曖昧性をもっとも多く感じる言葉であるとも言える。

「ある中国人は日本にはじめてきて、②のように『東京駅はどこですか』と聞いたとき『ちょっと』と言われ、その中国人は『ちょっと』を『ちょっと待ってください』の『ちょっと』だと思い、ずっと待ったが、人が来なかったので困ったことがある。」<sup>100</sup>といった例もあるように「ちょっと」の後ろに続く省略されたところを補う能力を外国人学習者が身につけることは辞書の意味を覚えるだけでは困難である。

#### 〈事例4：習慣的曖昧性「前向き」〉の分析

②は辞書の意味Bの「積極的」に相当し、曖昧性を感じることは少ないと言えるが、①は場合によっては断わりの表現になるときもある。このように日本人同士では暗黙の了解として理解される慣習的な用例が辞書の意味でしか解釈できない外国人学習者にはもっとも多く曖昧性を感じる要因となるのである。

#### 〈事例5：母語干渉的曖昧性「自分」〉の分析

「自分」ということばは本来、「ぼく」「わたし」の代わりに1人称を指す言葉として用いられるが、その使い方は三つに分けられる。①は1人称としての「自分」、②は2人称、③は3人称をそれぞれ表わしている。1, 2, 3人称にすべて使われる「自分」ということばを会話のなかから聞き分けることは外国人学習者にとっては容易なこととはいえない。特に韓国語学習者にとっては韓国語の自分に該当する「自己(ジャギ)」という言葉は1人称として用いることはなく、この

ような母語の知識がマイナス的に作用して学習者にとって曖昧性を感じる原因ともなるのである。このように母語の知識が干渉して感じる曖昧性は慣習的な曖昧性と共に、外国人学習者にとってはもっとも困難を感じやすい原因である。

以上、語彙上における5つの曖昧性を事例を取り上げることにより分析を加えてきたが、その結果を整理すると【表2】のようになる。

	語彙上における曖昧性の種類
事例1 「結構」	多義的曖昧性
事例2 「さき」	不確定的曖昧性（時間）
事例3 「ちょっと」	省略的曖昧性
事例4 「前向き」	慣習的曖昧性
事例5 「自分」	母語干渉的曖昧性

【表2】語彙上における事例分析の結果

ここで注目すべき点として、多義的曖昧性、不確定的曖昧性、省略的曖昧性は母語話者同士においても生じると言えるが、隠れたルールが見出しにくい慣習的曖昧性や母語に関して持っている知識がマイナスとして作用する母語干渉的曖昧性は「接触場面」においてももっとも顕在化しやすくなるということを指摘することができる。例えば、指導教官に向かって「あなたはおいくつですか」という質問をして失敗した、来日して間もない外国人学習者の事例<sup>(1)</sup>があるが、この事例には「あなた」という言葉を目上の人には用いないといった言語習慣における隠れたルールを学習者が見出せないことに起因する慣習的曖昧性が内在していると考えられる。

#### 4. 日本語教育における「接触場面」概念の導入—結びにかえて—

日本語教育において接触場面の特徴を教えることにはどんな意義があるのであろうか。日本語学習者が日本語を学習する際は母語話者の言語使用により大きく影響を受ける。しかし、フォーリナー・トークのように接触場面における母語話者の言語使用が特殊なものであるならば、学習者自身が不自然なことばのモデルをそのまま学習モデルとして受け入れ、これを模倣するといった危険を伴いかねない。したがって、母語話者のコミュニケーションルールをそのまま学習モデルとして提示するより、母語話者と日本語学習者の相互作用の面から場面を捉えること、すなわち接触場面の研究が必要となる。接触場面における母語話者と外国語話者の双方からの分析は場面分析を行う際の新たな視点として意味をもつのである。また、従来の知識の伝達にとどまった日本語教育に対して、接触場面において学習者が直面した問題を対象にするとともに、それらを学習者自身がモニター（訂正）<sup>(2)</sup>することによって困難から脱出できるようにすることが期待され

ることから、「接触場面」概念の導入は日本語教育における新たな可能性を提示することになる。

#### 注

- (1) ホール (Hall, E. T.) のコンテクスト論によると、日本の文化 (言語文化を含む) は人々がお互いに深い人間関係で結ばれているため特定の行動規範が伝統的に確立されているとされる。そのため、コミュニケーション形式も明確に規定され、単純なメッセージでも深い意味を持ちうる場面依存性が強い高コンテクスト文化であるとされる。
- (2) 筆者は韓国学習者15人を対象にして日本語コミュニケーションに対する意識調査、特に異文化間接触における困難点や日本語コミュニケーション上のトラブルの経験をインタビュー形式で調査した。そこで得られた主な答えを八つにまとめたが、八つの中で6件が曖昧性と関連がある項目と言える結果を得た。
- (3) Neustupny, J. V. (1996) 「Japanese Discourse Studies: Native and Contact Situation」『阪大日本語研究』8。
- (4) Ferguson らによって始められたフォリナー・トーク研究は母語話者が非母語話者とコミュニケーションを行う時、使用される言語の様々な特徴を明らかにしようとする研究領域である。特にリチャード (1993) によると、教室内での教師が用いるフォリナー・トークは一般的に形式が整っているとしている。例を挙げれば、発音や顔の表情の拡張、発話のスピードの減速と音量の増大、言いかえ、単純化、そして学習者が作った文を補って完成させることなどがある。
- (5) ネウストプニー J. V. (1995) 『新しい日本語教育のために』大修館書店。
- (6) 藤崎博也・星合忠 (1984) 「言語表現の曖昧性」田中幸吉編『知識工学』朝倉書店。
- (7) 国語学会編 (1980) 『国語学大辞典』東京堂出版。
- (8) 表に示した ( ) はそれぞれの略語として用いる。
- (9) 辞書的な意味の考察にあつたては、次の辞書を用いた。  
西尾実他編 (1989) 『岩波 国語辞典』第4版 岩波書店。
- (10) 彭飛 (1990) 『外国人を悩ませる日本人の言語慣習に関する研究』和泉書院。
- (11) 本論で取り上げた事例の他に、筆者は多義的曖昧性として「甘い」「まずい」、省略的曖昧性として「どうも」などを挙げるが、これらの具体的な事例分析の結果については、ここでは割愛させていただくことにする。
- (12) 接触場面における外国人側の特徴として学習者のモニター活動があげられる。ネウストプニー (1995) によるとコミュニケーション過程の中に何らかの問題 (不適切さ) が起こるといふ予測から話し手はこのような問題を生じさせないように一定の措置をとることを「事前訂正」とよび、コミュニケーションが開始されてから行われる訂正を「事中訂正」「事後訂正」と呼んでいる。

## 参考文献

- 国語学会編 (1980) 『国語学大辞典』 東京堂出版。
- ネウストプニー J. V (1995) 『新しい日本語教育のために』 大修館書店。
- Neustupny, J. V. (1996) 「Japanese Discourse Studies: Native and Contact Situation」 『阪大日本語研究』 8。
- 芳賀綏・佐々木瑞枝・門倉正美著 (1996) 『あいまい語辞典』 東京堂出版。
- 彭飛 (1990) 『外国人を悩ませる日本人の言語慣習に関する研究』 和泉書院。
- P. A. リチャード・アマト著・渡辺時夫ほか訳 (1993) 『英語教育のスタイル』 研究社出版。
- 深谷昌弘・田中茂範 (1996) 『コトバのく意味づけ論』 紀伊国屋書店。
- 藤崎博也・星合忠 (1984) 「言語表現の曖昧性」 田中幸吉編 『知識工学』 朝倉書店。
- Ferguson, C. (1975) *Toward a characterization of English foreigner talk*. *Anthropological Linguistics*, 17 (1), 1-14.
- ホール, E・T 著/國広正雄・長井善見・斎藤美津子訳 (1966) 『沈黙のことば—文化・行動・思考』 南雲堂。
- ホール, E・T 著/岩田慶治・谷奉訳 (1979) 『文化を超えて』 TBS プリタニカ。

## 資料

### 〈事例2〉「さき (先)」

#### ・辞書的意味

- A (前方に) 突き出た部分。その端
- B 物・作用などが向かう所
- C 順序が前であること

#### ・場面例

- ①「指先にトンボが止ってる」  
「本当だ」
- ②「行き先はもう決まったんですか」  
「それがちょっと……」
- ③「先程は失礼しました」  
「いいえ、こちらこそ」
- ④「この先どうなるかを考えると不安だね」  
「本当に、そうだよね」

### 〈事例3〉「ちょっと」

#### ・辞書的意味

- A 少しであること

B そう簡単には

・場面例

①「あのう、」

「はい、なんですか」

「これちょっと……」

②「あのう、駅はどこですか」

「ちょっと……」

③「ちょっと、相談したいことがあります、明日時間ありますか」

「明日はちょっと……」

④「なにしていますか」

「これは、ちょっと……」

〈事例4〉「前向き」

・辞書的意味

A 正面に向くこと

B ものの考え方が積極的・発展的であること

・場面例

①「ご提案につきましては、前向きに検討させていただきます」

「よろしく願いいたします」

②「いつも前向きに考えた方がいいよ」

「そうだね」

〈事例5〉「自分」

・辞書的意味

A その人自身

B わたくし

・場面例

①「自分はそう思いませんが」

②「自分だけつらそうに言わないでよ」

③「彼は自分のことにとっても厳しい人だ」